

続 子どもは大人になりたいか

Do Children Want to Be Grown-Ups? : A Continuation

発達心理学教室 田丸敏高

Toshitaka Tamaru* : Do children want to be grown-ups ? : a continuation (Journal of the Faculty of Education, Tottori University, <Education Science>, 1990, 32-1)

目 的

前回の報告では、「早く大人になりたいか」という質問に対する子ども（小学生）の答え（理由づけ）を分析しながら、現代の子どもの大人や社会に対する考え方を明らかにした⁽¹⁾。その際、子どもの思考に接近するときの発達の観点と社会的観点との重視性を強調した。前者については、子どもがものを考える際の知的手段としての「対」の役割、対立的性格——思考を助長するものであると同時に制限するものであるという性格——に注目しながら⁽²⁾、子どもの思考の多様性と制限性を明らかにした。子どもの思考において、「大人」は他の項とともに対を構成している。したがって、子どもが質問を受けて大人について考えようとするときには、その子どもの持つ対の性格——「大人」と対になっているもう一方の項が何であるか——に影響されて、大人になりたいと思ったり、なりたくないと思ったりする。とくに、しばしば「大人」と対を為している「労働」をどのように表象するかが、こうした判断に決定的な影響を及ぼす様子を示した。後者については、現代の子どもたちの置かれている社会的な状況を考慮にいれながら、子どもの言うことの意味を探った。日本の産業構造の変化にともなう大人の労働の状態が、年齢に応じた形で、彼らの労働観や大人に対する意識を規定しているのではないかということについて考察した。

今回の報告では、小学生に加えて、幼児も含む新たな資料を用い、大人をテーマとする社会認識における年齢的な特徴についてさらに追究してみたい。そして、幼児期から学童期に至る子どもたちの思考の特徴に基づいて、彼らの社会認識の発達を促す諸条件について考察してみたい。

方 法

対象児 米子市B小学校, C小学校, D幼稚園 73名 (男37名, 女36名)
うち 幼児 (5歳児) 24名 (男13名, 女11名)
小学2年生 24名 (男12名, 女12名)

*Department of Psychology, Faculty of Education, Tottori University

小学4年生 25名 (男12名, 女13名)

日時 1989年10月から11月

場所 学校あるいは幼稚園内の室内

手続き 子どもと1対1で向かい合い、大人と社会について一連の質問をする(質問項目数14)。その際、回答結果よりも、子どもの考え方・思考過程を取り出そうと努力する。インタビュー時間は1人あたり20分程度である。対話の様子はカセットテープレコーダーに録音し、それを起こしたものを1次資料とした。今回取り上げる質問項目は、「あなたは、早く大人になりたいですか」というものである⁽³⁾。

結果と考察

A. 「早く大人になりたいか」に対する回答

はじめに、質問「早く大人になりたいか」に対する子どもの回答を、年齢別に整理する。表1は、その結果を示したものである。

「早く大人になりたい」と答えた子どもは、幼児19人(79パーセント)、2年生16人(67パーセント)、4年生10人(40パーセント)であった。幼児では約8割いたのに、2年生では3分の2になり、6年生では4割となる。幼児においては、「なりたい」と言う子どもは非常に高率である。また、年齢が長ずるにしたがってだんだん「早く大人になりたい」と言う子どもの割合が減少する。

表1. 「早く大人になりたいか」に対する年齢別回答結果

年齢	はい	いいえ	その他	計
幼児	19 (10, 9) 79	3 (2, 1) 13	2 (1, 1) 8	24 (13, 11)
小2	16 (6, 10) 67	8 (6, 2) 33	0 (0, 0) 0	24 (12, 12)
小4	10 (4, 6) 40	15 (8, 7) 60	0 (0, 0) 0	25 (12, 13)

人数 (男, 女)
割合 (パーセント)

この結果を前回の結果と比べてみよう。図1は、それを示したものである。

今回の調査の方が、「早く大人になりたい」という子どもの割合が若干高いが、年齢が長ずるにしたがって、「なりたい」と言う子どものが減少するという傾向は同様である。

B. 子どもの答えと理由づけの年齢的特徴

次に、「早く大人になりたいか」という質問に対する答え、およびその理由づけの年齢的特徴を見ていきたい。以下は、質問者に「あなたは早く大人になりたいですか」とたずねられた直後から、

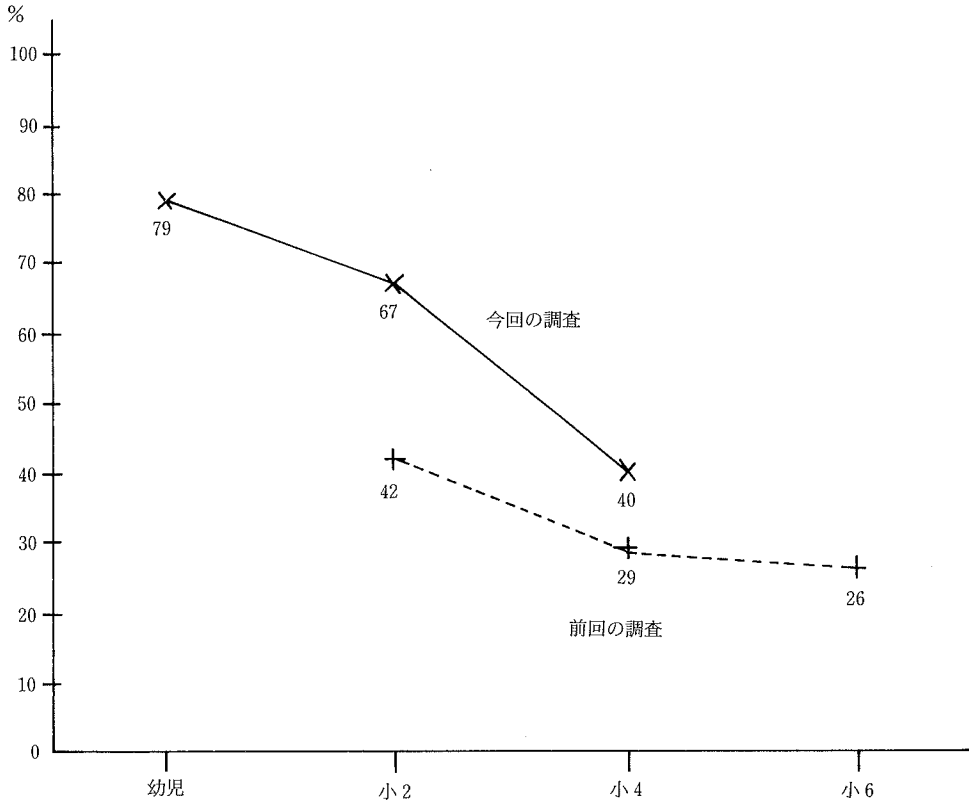


図1 「大人になりたい」子どもの割合

子どもと質問者とのやりとりの様子を記述したものである。

幼児ではほとんどの子どもが大人になりたいと言うが、その理由はどのようなものであろうか。

なりたいけれど理由はわからない

幼児では、24人中6人の子どもが理由を聞かれて「わからない」と答えている。なりたいとは思っても、あらためて理由を聞かれると答えに窮するのであろう。

幼児(男) 「うん。」——どうして大人になりたいのかな?——「わかんない。」

幼児(女) 「はい。」——どうしてそう思うのかな?——「わからん。」

なお、こうした傾向は、小学校2年生にもある。(小2では24人中8人が答えに窮している。)

小2(男) 「はい。」——どうしてそう思うの?——「えっ、わかんない。」

小2 (女) 「(うなづく)」——どうして早く大人になりたいのかな?——「...」——なんかわけがある、大人になりたいっていう?——「... 忘れました。」

本児は、答えに困って、「忘れました」と言い訳をしている。

仕事

幼児においても、「大人」は「仕事」と対を為している。そうした子どもは、大人に早くなりたいという理由として仕事のことをあげる。もっとも幼児の中には、漠然とはしていても仕事について何らかのイメージを持っている子どもがいる。

幼児 (男) 「うん。」——どうして大人になりたいのかな?——「早く仕事がしたい。」

幼児 (男) 「うん。」——どうしてかな?——「会社に行くな。」——どんな会社に行きたいの?——「働く。」

幼児 (男) 「なりたい。」——どうしてかな?——「お仕事がしたいから。」——そう、お仕事すると何かいいことあるの?——「...」——やってみたいの?——「(うなづく)」

本児は、大人を仕事と結びつけて捉えてはいるが、仕事のイメージは、漠然としている。そのため、仕事をするといいいことがあるのかと聞かれて答えに困ってしまう。

幼児 (女) 「なりたい。」——どうしてかな?——「働けるけん。」——働くといいいことがあるのかな?——「ある。」——どうして働いてみたいと思った?——「いろんなことができる。」

本児は、曖昧ではあるが、多様な活動につながる仕事のイメージを持っている。だから、働くことは、いろんなことができることであると考ええる。

幼児 (女) 「ううん。」——じゃあ、ずっと大人になりたくない?——「うん。」——どうしてかな?——「大人になると仕事ができる。」——でも大人になりたくないの?——「うん。」

この子どもは、大人になりたいかと聞かれて、否定する。仕事が必ずしもいいイメージではないのだろう。しかし、仕事をしんどい労働として捉えているかという点、そうは言えない。本児は、仕事がいやだという表現ではなく、仕事ができるという表現を用いている。

次の子どもたちは、仕事を具体的に考えている。

幼児 (女) 「なりたい。」——どうしてかな?——「...」——どうして大人になりたいのかな?——「看護婦さんになりたいから。」——へえー、どうして看護婦さんがいいのかな?——「わかんない。」

幼児(女) 「なりたい。」——どうしてそう思うの?——「ケーキとかがね、上手に作れるから。」——その他にも大人になりたいっていうことある?——「ない。」

幼児(男) 「うん。」——どうしてかな?——「だってお父さんね、自分のおうち建てたり、大工さんやってる。」

以上、3人の子どもたちは、身近に経験したことや伝聞したことをもとに、仕事を場面的・具体的に思い浮かべているのであろう。こうした子どもたちは、大人になることを肯定する。それは、小学生も同様である。

小2(女) 「はい。」——どうして大人になりたいのかなあ?——「仕事ができるから。」——そう。じゃあ、何かやりたい仕事ってあるの?——「保育園の先生。」

お金

幼児段階から、すでに大人はお金と結びついて表象される。子どもにとってお金は魅力的である。

幼児(男) 「はい。」——どうして大人になりたいのかな?——「ご飯をいっぱい食べる。」——大人になるの、じゃあ、大人になりたいのはどうしてなりたいたいのかな?——「お金がいっぱい... いっぱい... お金がいっぱい持たれるから。」

働くこととお金がもらえることと関係があることは、幼児でも気づく。

幼児(女) 「なりたい。」——どうしてかな?——「会社でね、お金がね、いっぱいたまるから。」——会社でお金がいっぱいたまるのか、どうしてかな?——「働いたらお金がふえる。」

幼児(男) 「なりたい。」——どうしてそう思うの?——「あのねー、うんとねー、早く会社に行ってお金がもらえるから。」——どうして金がもらるといいの?——「うんとねー、お金がもらえてねー、食料買ってねー、生きれるけん。」

幼児(女) 「うん。」——どうしてかな?——「働けるから。」——どうして働きたいの?——「お金がいっぱいある。」

大人は、仕事や会社と結びつき、それを介して、お金と結びつく。そこで、大人になればお金がいっぱいになるので、早く大人になりたいと言う。

学校・勉強

大人になることは成長することであるが、それがいきなり成人のイメージをもたらさないこともある。そうしたときは、大人のことを聞かれて、学校に通う人を思い浮かべる。

幼児(女) 「うん。」——どうして大人になりたいのかな?——「学校に行きたいから。」——学

校ってどんな学校？——「K小学校。」——どうして学校に行きたいのかな？——「頭が良くなるから。」——学校に行くと早く大人になれるのかな？——「...」

本児は、学校と成長とを結びつけて考えている。

しかし、幼児でも、すでに勉強に対する否定的なイメージを持っている子どももいる。

幼児（男） 「うん。」——ずっと大人になりたくないかな？——「いいえ。」——いつかはなりたい？——「はい。」——どうして早く大人になりたくないのかな？——「勉強が難しいから。」——そう、どんな勉強か知ってる？——「よくわかんない。」——その他にもなりたくないってわけがある？——「わからん。」

幼児（男） 「なりたくない。」——ずっとなりたくない？——「違う。」——じゃあ、どうして早く大人になりたくないのかな？——「早く大人になったらね、勉強とかあるから。」

以上が、幼児の大人に対する主な考え方である。今回の調査は、24人を対象にしている。その程度の規模の集団に対する調査で現われてくる理由づけは、幼児では、非常に限られている。理由づけにおける主なテーマは、仕事、お金、勉強であった。幼児において、知的手段としての対は、固定的である。対を通して、大人のいろいろな側面が想像されることはあまりない。

次の例は、大人を子どもと結びつけたたった1人の子どもの例だが、幼児の対の特徴がよく出ている。

幼児（男） 「子どもの方。」——ずっと大人になりたくない？——「でも、大人にならないと子どもができないから。」——あつ、子どもができないのか。じゃあ、いつかはなりたいたいんだ？——「うん。」——どうして大人になりたいと思うの？——「子どもができるから。」

本児では、「大人」と「子ども」という2つの項で構成されている1つの対の中で思考が堂々めぐりしている。

小学生になると、早く大人になりたいかという質問に対する答えも分化してくるし、理由づけも多様になる。小学二年生に対しても幼児と同数の子どもに質問しているが、仕事、お金、勉強のほかにもいろいろなテーマの理由づけが現われる。

赤ちゃんを産む

小2（女） 「はい。」——どうしてかな？——「早く赤ちゃんが産みたいから。」

大きくなる

小2（女） 「うん、早く大人になりたい。」——どうしてかな？——「...」——どうして早く大人になりたいのかな？——「お母さんやお父さんみたいに早く背が高くなりたい。」

死

小2 (男) 「なりたくない。」——じゃあ、ずっとなりたくないかな?——「... なりたくない」——どうして大人になりたくないのかな?——「死ぬから。」——大人になったらみんな死ぬの?——「おじいさんになったら。」——そうか。死んだらどうなるのかな?——「お墓。」——... その他にも大人になりたくないわけがある?——「ない。」

子どもは、大人と死をよく結びつける。大人を死とごく間近にいるものとして考える。こうしたことは、小4になっても続いて現われる。

小4 (女) 「なりたくありません。」——ずっと大人になりたくない?——「はい。」——どうして大人になりたくないと思うの?——「早く死ぬから。」

一人暮らし

小2 (女) 「はい。」——どうしてかな?——「一人でなんか... 暮しとかできるけん (できるから)。」

車

小2 (男) 「はい。」——どうしてかな?——「車に乗ったり、お仕事に行ったり。」

本児は、複数の理由をあげている。こうしたことも、学童期の子どもの特徴である。

怒られない

小2 (男) 「なりたい。」——どうして?——「大人の方がお母さんに怒られないですむから。」——ふーん、怒られるの、よく?——「うん。」——どうして?——「悪いことばかりするから。」——...——他に何かあるかな、早く大人になりたいっていうの?——「車が乗りたい。」——そうか。大人になったら車に乗れる?——「うん。」——ふーん、みんながみんな車に乗れる?——「うん。」——誰でも?——「うん。」——大人は全部?——「うん。」

本児は、はじめ母親に怒られないですむという理由をあげ、ついで、車に乗れるという理由をあげている。

遊び

小2 (男) 「なりたくない。」——どうしてかな?——「子どもはいっぱい遊べる。」——うん、じゃあ、その他に何かある?——「ない。」——...——ずっとMくんは大人になりたくないと思う?——「ずっとじゃない。」

小2 (女) 「なりたくない。」——じゃあ、ずっとなりたくない?——「ずっとってことはない。」——いつかはなってもいいかな、大人に?——「...」——じゃあ、どうして大人になりたくないのかなあ?——「大人は働いたりして遊ぶときがあまりないから。」——その他にも何かわけがある?——「... わかんない。」

本児は、働くことと遊ぶことを対立させて考えている。働くことは、具体的なイメージではなく、苦役としての労働のイメージである。

労働

小2(男) 「なりたくない。」——ずっと、いつまで経っても大人になりたくない?——「うん。」——どうしてかな?——「大人になると仕事するとき、仕事するのがたいがいから。」——子どもは?——「遊べたりする。」——仕事しないのか、子どもは?——「うん。」——じゃあ、大人になって仕事をするとうしていやなの?——「難しいし、体力がいる。」——もし簡単な仕事があったらどうしよう?やってもいいかな?——「うん。」——そうか、そういうんだっとなってもいい、大人に?——「はい。」

このように、遊びと対立した労働は、「難しいし、体力がいる」というイメージになる。質問者によって別の対——「大人」と「簡単な仕事」——が提示されると、本児は即座に考えを変え、大人になってもいいと言う。

高校生か大学生になりたい

小2(女) 「もうちょっと、まあ、高校生か大学生くらいになりたい。」——そうか。お姉さん、大学生なのに、大学4年生。——「うそー、えっ、大学4年生?」——そう。大学生になりたいか。大学生とか高校生は大人にはいるかな?——「うーん、高校生はまだちょっと子どもじゃないのかなあ。まあ、ちょっとわかんないけど。」——大学生はどうかな?——「ほとんど、まあちょっとは子どもっぽいけど、ほとんど大人じゃないんですか?」——へー、そうか。じゃあ、早く大人になりたい?——「なりたくない。」——ずっと、いつまで経っても大人になりたくない?——「いえ、いえ、いいえ。子どものままもいやだ。」——そうか、どうして?——「だって、子どものままでしたら、いつまでも大きくなると、えっと、まあそれしかわからないけど。」——何か困るかなあ?——「困るんじゃないかな。」——そうかなあ、何が困るか?——「あっ、わかった。」——何だ?——「お仕事とかできないから。」——お仕事するんだ?——「しますよ。」——大人になって?——「はい。したい。」——したいの。——「いま決まってる。」——良かったら教えて。——「いいよ。マクドナルドみたいな店が、という店で働きたい。」

本児は、質問者に対しておとなびた応接をしている。早く大人になりたいかと聞かれて、「高校生か大学生」という自分なりの答え方を示している。大人もいやだしずっと子どものままでも困ると考え、第3の道を捜し始める。しかし、大人について多面的に考えるには至っていない。そうした例は、小4になって、数多く現われるようになる。

小4になると理由づけは、さらに多様化する。

ファミコン

小4(男) 「いいえ、まだ子どもがいい。」——じゃあね、ずっと大人になりたくないの?——「はい。」——ほんと。どうしてかな?——「大人になると仕事せんといけんしね、あれ、びびりしごかれるしね、いやだから。」——その他にもなりたくないっていうわけがある?——「ファミコンができません。」——大人になったらできないの?——「笑われてしまう。」——あら、どうして?—

—「ファミコンは子どものするもんだもん。」—そうか。その他にもわけがある？—「もうない。」

夢

小4 (女) 「はい。」—どうしてですか？—「夢をかなえたい。」—その夢っていうのは何だろう？—「お医者さんになりたい。」—何のお医者さんになりたいの？—「えーと、その国立病院みたいに、全部の院長さん。」

買物

小4 (女) 「はい。」—どうしてかな？—「えっとー、大人になったら好きなことができるから。」—好きなことってどんなこと？—「いろんな物が買える。」—他には？—「ありません。」

経験

小4 (男) 「いいえ。」—ずっとなりたくない？—「ずっとじゃないけど、やっぱり子どもの頃の体験とか十分に大人になって、で、大人のときに大人になっても仕事をしたり、経験をものにしていきたいから。」

本児の物言いは、一般的で反省的である。この年齢特有の新しい思考方法を示している。次の子どもも同様な特徴を示している。

もっといい大人になりたい

小4 (女) 「なりたい。」—どうして大人になりたいのかな？—「いまの大人よりもっと良くなりしたい。」—いまの大人よりも...、ふーん、どういうふうに？—「どういうふうになって、うーん... やさしく。」—他にもある？—「ありません。」

自由

小4 (男) 「なりたい。」—どうして大人になりたいのかな？—「えっと、いま自分が子どもで、大人から他のことも見てみたいし、いろんなことをしてきたいから、自由に。」—まだ他のこともある？—「もうない。」

判断基準としてのお金

仕事とお金は、子どもにとって重要なテーマである。

小4 (女) 「はい。」—どうしてかな？—「大人になったら仕事ができるから。」—早く仕事がしてみたいの？—「(うなづく)。」—「そうか。その他にも何かわけがあるかな？—「仕事して、... なんか... おもしろいことをやってみたい。」—そのおもしろいことって、頭の中にある？—「はい。」—どんなことかなあ？—「お金をもらったりとか。」

小4では、理由づけが広がると同時に、複数の理由について斟酌したり、対立する理由について比較検討したりする。大人になりたいかどうかの基準に、「お金」がなりやすいことは、前回は報告

した⁽⁴⁾。

小4 (男) 「いいえ。」——どうしてかな？——「いつまでも遊べて、大人になると勉強とかいろいろしないといけないから。」——そう、ずっと大人になりたくないのかなあ？——「大人になっても少しはいい。」——・・・——何か大人になっていいことあるかな？——「あります。」——どんなこと？——「お金持っていていろいろな物買えるから。」

多面的思考

小4 では、大人にさまざまな側面について、思考し始める。

小4 (女) 「なりたくありません。」——ずっと大人になりたくないのかな？——「少しぐらいならなってもいいじゃないか。」——「どうして少しぐらいならいいの？——「子どもだと自由に遊べるからだし、けど大人だと毎日働いたりしなきゃいけないから。でも、少し大人になってみたいなあと思ったりするから。」——うん、どんなところが少しなってみたいなあと思うの？——「よく車に乗ったりオートバイに乗ったり、あれ、大人じゃないとできないことだから、少しなってみたい。」——その他にも何かなってみたいというところある？——「わかりません。」——じゃあ、なりたくないっていうのは、他にも何かあるのかなあ？——「おばあさんになると皺があるとかなるから、皺とか出るのいやだ。」——そう。その他にもある？——「わかりません。」

小4 (女) 「はい。」——どうしてかな？——「学校は勉強ばっかしであんまりおもしろくない。」——その他にもある？——「その他にはね、大人は自分の好きなように生きていけるけど、子どもはお母さんたちに命令されてばっかりでいやになってくる。」——そうか。自分の好きなように生きるってどういうことかなあ？——「自由に... えっと、働きたいときに働いて、で、遊びたいときに遊んで、休憩したいときに休憩したりしたい。」

小4 (女) 「ううん。」——なりたくないの？どっちだ？——「子どもの方がいいな。」——じゃあ、ずっと子どもの方がいいのかなあ？——「うーん、ずっとってわけにも。」——じゃあ、どうしていま子どもの方がいいと思うの？——「子どもだとずっと遊んでいてもいいし、... 仕事もいっぱいできる。」——仕事がいっぱいできるの？——「大人はいやだ。仕事はいやだ。」——どうして仕事はいやだ？——「疲れるから。」——まだ、疲れるってことの他にもいやだなんて思うことある？——「他には... もっと勉強せんといけんだろうし。」——大人の方が？——「うん。」——そうか。もうないかな？——「お母さんになったら子どもの面倒みなくちゃいけないし、みてもらう方が楽でいい。」——そうか。まだある？——「(首を振る)」

本児は、最初仕事について言ったとき子どものする仕事（やりがいのある）を思い浮かべた。しかし、大人と結びつけたとき仕事は疲れる労働のイメージになった。

小4 (女) 「いいえ。」——どうしてかな？——「クリスマスプレゼントがもらえないから。」——その他にもわけがある？——「えーっと、赤ちゃんを産むときとか、そういうときに面倒くさいし、子どもなら自由に遊べるし、ああいうことができるから。」——その他にもあるかなあ？——「大

人はいちいち働いていけないといけないけど、子どもは勉強するだけで、そういう働いて面倒くさいっていうか、給料もらわずにお母さんに育ててもらえるから、それで。」——ずっと大人になりたいくない？——「さあ。」——わからない？——「はい。」

小4 (男) 「なりたくありません。」——じゃあ、ずっとなりたくない？——「うん。」——どうしてかな？——「あのね、年をとったら死ぬけん。」——死んだらどうなるの？——「地獄か天国に行く。」——「それで大人になりたいくない。まだ他にもある？——「大人になったらファミコンでできるけん。」——ほんと？——「だって、大人になったら仕事でおらんく(いなく)なったりする。」——まだある？——「性格が変わってしまう。」——大人になったら、どういう具合に？——「ぼくが、たとえば、真面目になったりする。」——そう。まだその他に、大人になりたいくないっていう理由はある？——「だって、お年玉もらえるけん。」——他には？——「ない。」

C. 理由づけにみる子どもの社会認識の特徴とその発達の条件

大人について語る時、子どもは大人のどのような面に着目するのだろうか。各年齢集団ごとに見てみると、大人について語る時のテーマは、年齢が高くなると増えることがわかる。幼児では、「仕事」や「お金」、「勉強」にほぼ尽きていた。しかし、小2からは、大人のさまざまな面が語れるようになる。これは、「大人」と対になっている他の項に規定されている。各年齢集団を考えたとき、対の種類は年齢にしたがって、とりわけ小2から増加していた。また、個々の子どもの言うところをみると、幼児においては、たとえば「大人は仕事」といえばそれだけで終わり、大人の他の側面はほとんど触れられないが、小4ころから一人ひとりの子どもが大人のいろいろな面について語るようになる。語り方は、年齢が高くなるにしたがって単発的から多面的になると言える。以上、理由づけの年齢の特徴から、幼児期から小学校中学年、すなわち、5、6歳から9、10歳にかけての思考(社会認識)の発達過程を大きくいくつかの段階に区切れることがわかる。それは、次のように整理できる。

第1段階 少数のテーマによる単発的思考

第2段階 多数のテーマによる単発的思考

第3段階 多数のテーマによる多面的思考

第1段階は、幼児期を中心とした段階であるが、「大人」と対になるのは「仕事」や「お金」、「勉強」などごく少数のものである。もちろん、これは、調査人数に制限されてのことであるから人数を増やせば、対の種類も若干増えることは予想される。しかし、子ども一人あたりの種類ということでは、少数であることには変わらない。子どもは、少数の対に制限されて思考する。これは、幼児の思考の消極的な側面である。しかし、思考が質問者の持ち出す課題に応じられ始めているということも確認しておかなければならない。これは、幼児の思考の積極的な側面である。第2段階は、同じく対に制限された思考であるが、第1段階に比べて対の種類は多様である。1年齢たった24、5人を対象にした調査であったが、子どもにより実に多数のテーマが現われている。質問者によって設定された課題で思考しなければならないときでも、それぞれの経験したこと、伝聞したことが思考の対象となる。子どもそれぞれの思考は、それぞれの持つ対を通じて多様化すると言える。し

たがって、早く大人になりたいかどうかという問題に対する結論も別れてくる。考え方の個人差が現われてくる。第3段階になると、対を相互作用させながら、大人について多面的に思考し始める。子どもは、対話の中で、大人にもいろいろな面があるということを考える。そして、それぞれの面を比較することができる。大人についての事実をいろいろな面から分析することが可能になる。

ところで、こうした発達段階は、無条件に設定されるものではない。現実の思考は、対象的・対人的諸関係の中で展開する。年齢特有の構造をもつ対を使って思考する子どもには、それに応じた諸関係が必要である。新しい思考対象が提起されることはもちろんである。子どもが聞かれもしないのに大人についてあれこれ思考する、ということは考えられない。子どもの思考を引き出す対話者の存在は、まずもって必要である。しかし、問題はそれだけではない。単発的思考ではあるが多数のテーマを考えることもできる段階では、とりわけ集団の意義が大きい。集団は、さまざまな経験をぶつけあい、思考を多様化することを可能にする。もちろん、そのためには、適切な規模と適切な指導とが必要であろうし、また何よりもこのときの集団には、思考の自由・表現の自由が保障されていなければならないだろう。そうした自由で導かれて、子どもはお互いの考えをぶつけあい、自らの対を豊富にしていく。そのことが、次の段階の多面的思考につながっていく。多面的思考の段階では、具体的な事実が提起されそのさまざまな面が考慮されなければならない。そして、何が判断基準になるのか反省されなければならない。科学の初歩——事実による検証と民主的討論——が求められる。こうして、多面的思考は、次の段階である思春期における本質的思考——現象と本質とが区別され、あらゆる事象について根拠が求められる——を準備する。

注

- (1) 田丸敏高 1989 子どもは大人になりたいか 鳥取大学教育学部研究報告(教育科学) 31-2
- (2) 子どもの思考における「対」の役割や性格については、ワロンが発見し、詳細に検討している。
Wallon, H., 1945, Les origines de la pensée chez l'enfant, 滝沢武久・岸田秀(訳)子どもの思考の起源(上) 明治図書 1968 80-204ページ
- (3) 今回用いた資料は、谷村智恵美が1989年度卒業研究(指導教官 田丸敏高)に際して収集したものの一部である。分析は、筆者が独自に行った。なお、谷村の卒業論文は、「子どもの大人に関する認識」としてまとめられている。
- (4) 文献(1) 445-446ページ

付 記

本研究報告では、鳥取大学教育学部1989年度卒業生・谷村智恵美氏からインタビュー資料を提供していただきました。ここに、御礼申し上げます。

(1990年4月20日受理)